

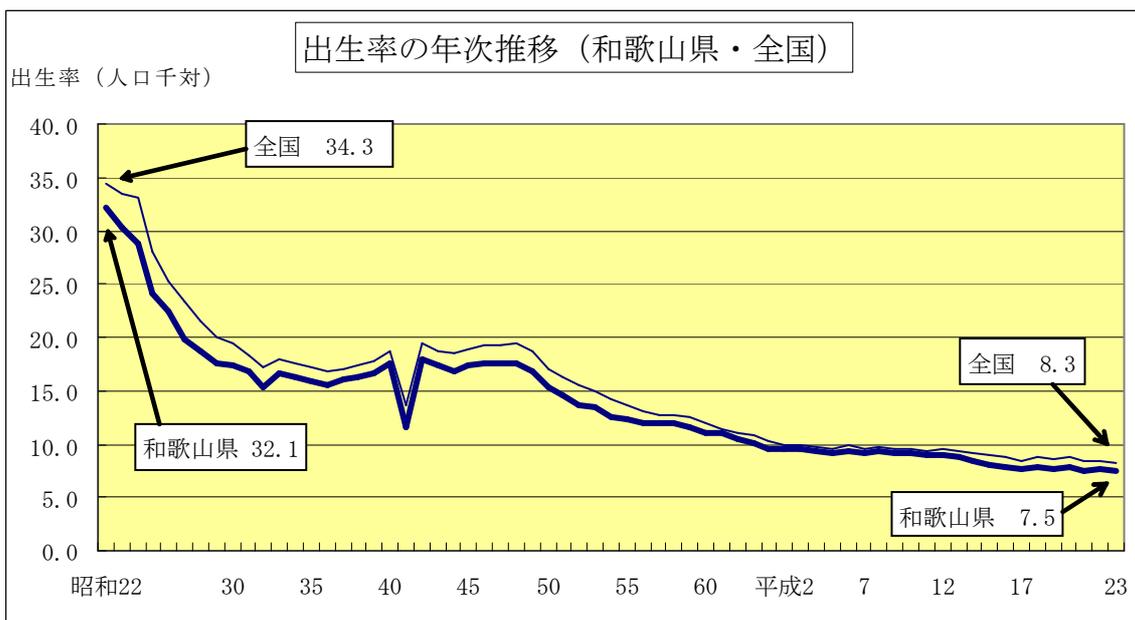
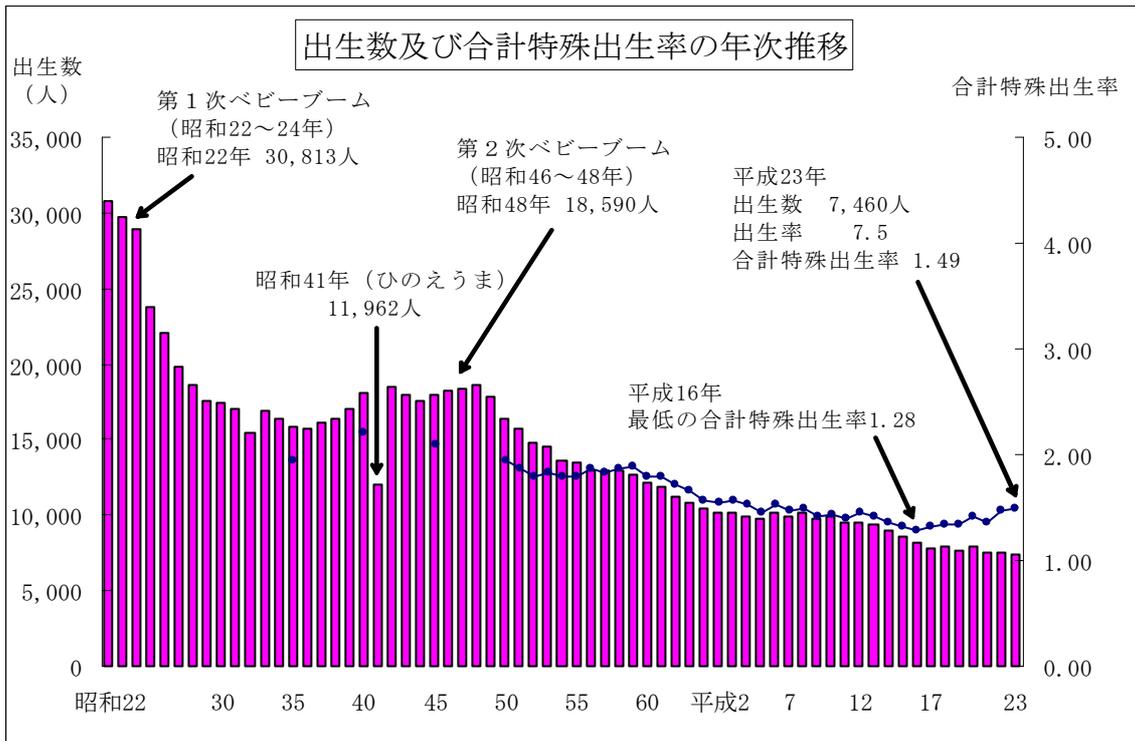
Ⅲ. 結果の概要

1 出生

平成23年の出生数は7,460人で、前年の7,587人よりも127人減少した。

出生率（人口千対）は7.5で前年の7.6を下回った。また、合計特殊出生率は1.49で、前年の1.47を上回った。

昭和50年以降、出生数は減少を続け、平成に入ってから増加と減少を繰り返しながら減少傾向にある。



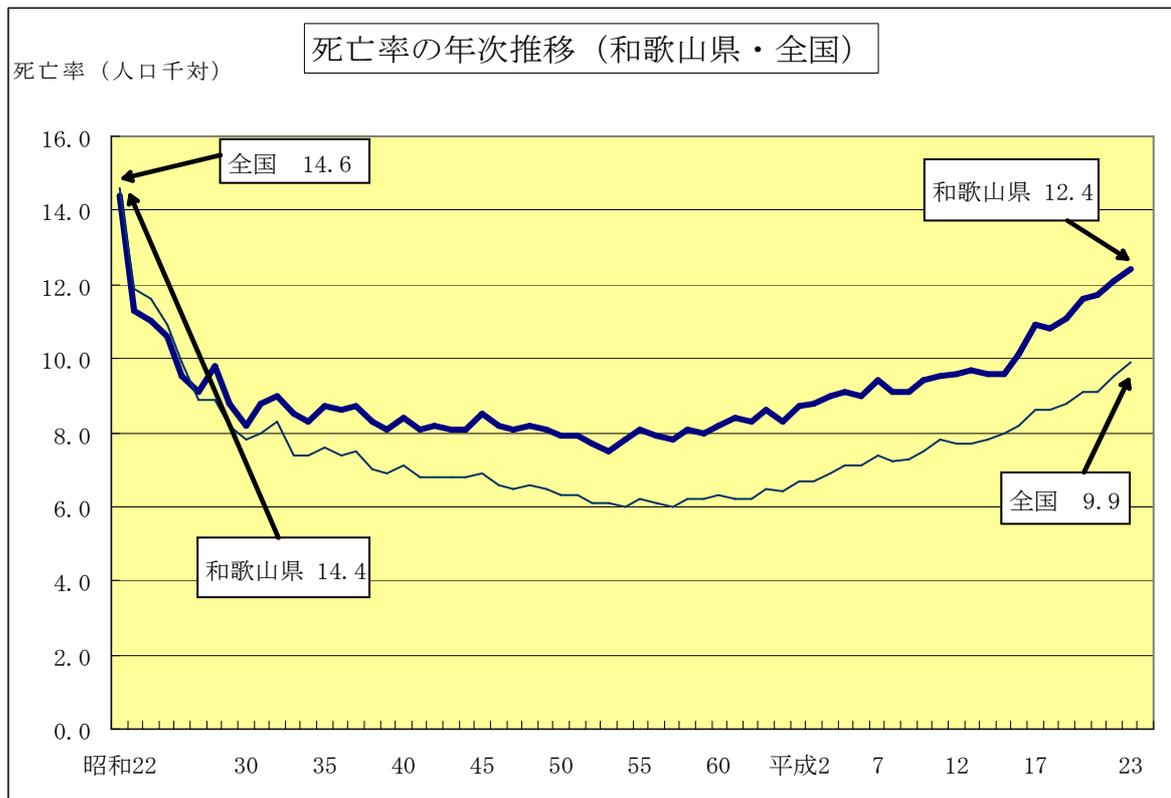
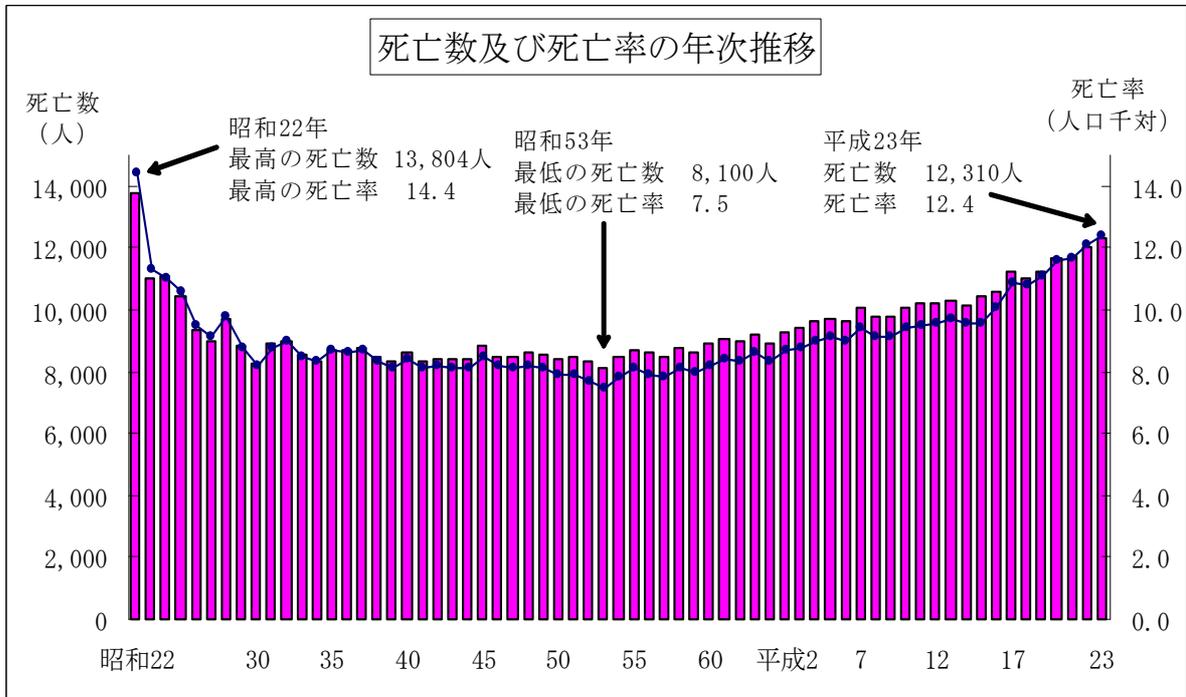
2 死亡

(1) 総死亡

平成23年の死亡数は12,310人で、前年の12,049人より261人増加した。

死亡率（人口千対）は12.4で前年の12.1を上回った。

昭和26年以降は8,000人前後で推移していたが、平成7年及び平成10年以降は1万人以上となり上昇傾向にある。



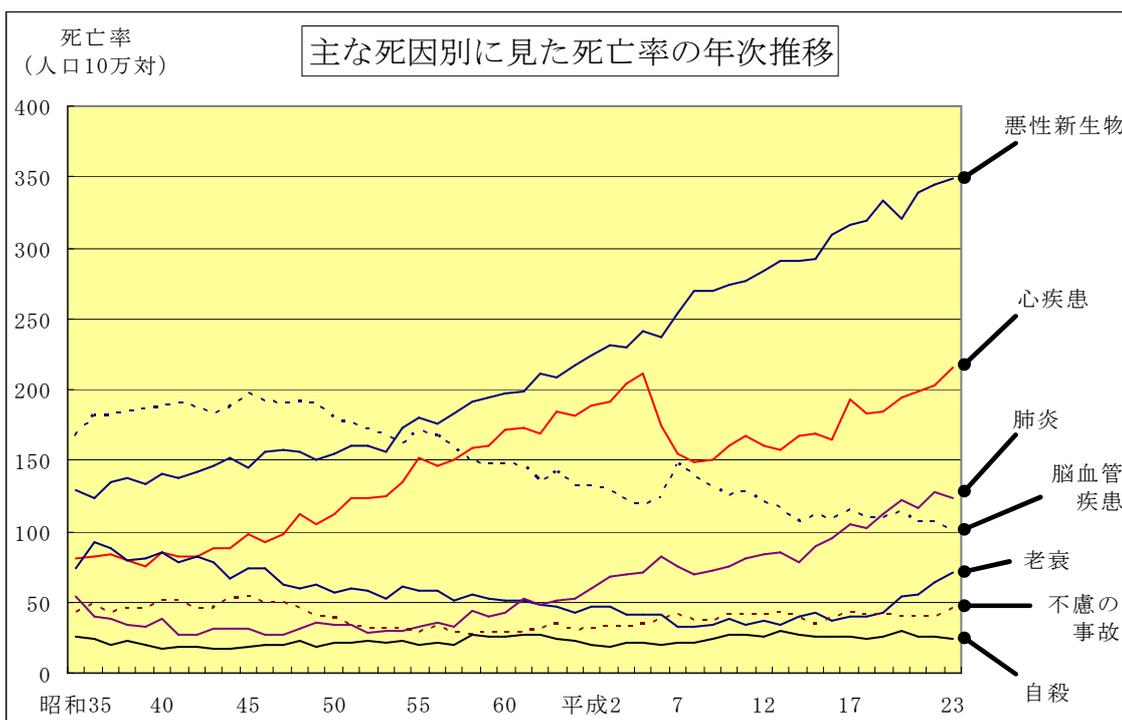
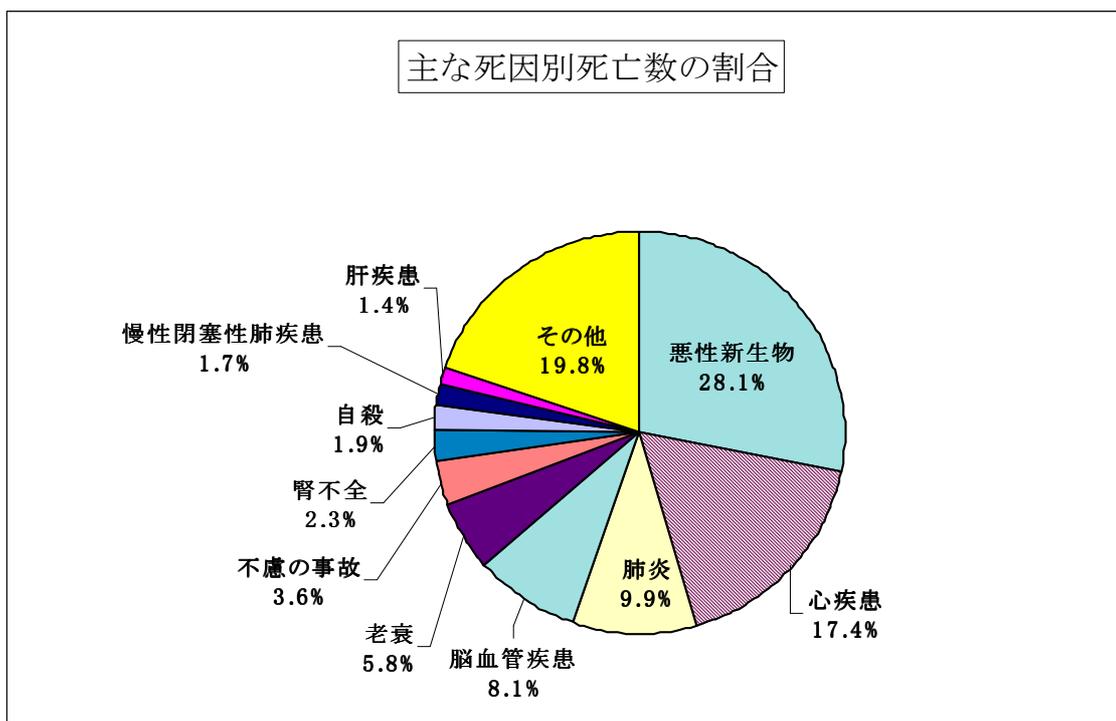
(2) 死因別死亡

死因別に見ると、死因順位の第1位は悪性新生物、第2位は心疾患、第3位は肺炎であり、全死亡者に占める割合は、それぞれ28.1%、17.4%、9.9%となっている。

主な死因の年次推移を見ると、悪性新生物は、昭和54年以降から第1位で上昇を続けているが、平成23年の人口10万人当たり死亡率は349.2で前年より4.3ポイント上がった。

心疾患は昭和58年に脳血管疾患に変わって第2位となり、増減はあるものの死亡数・死亡率とも上昇傾向にある。

肺炎は平成18年まで第4位であったが、平成19年からは脳血管疾患にかわって第3位となり、増減はあるものの上昇傾向にある。

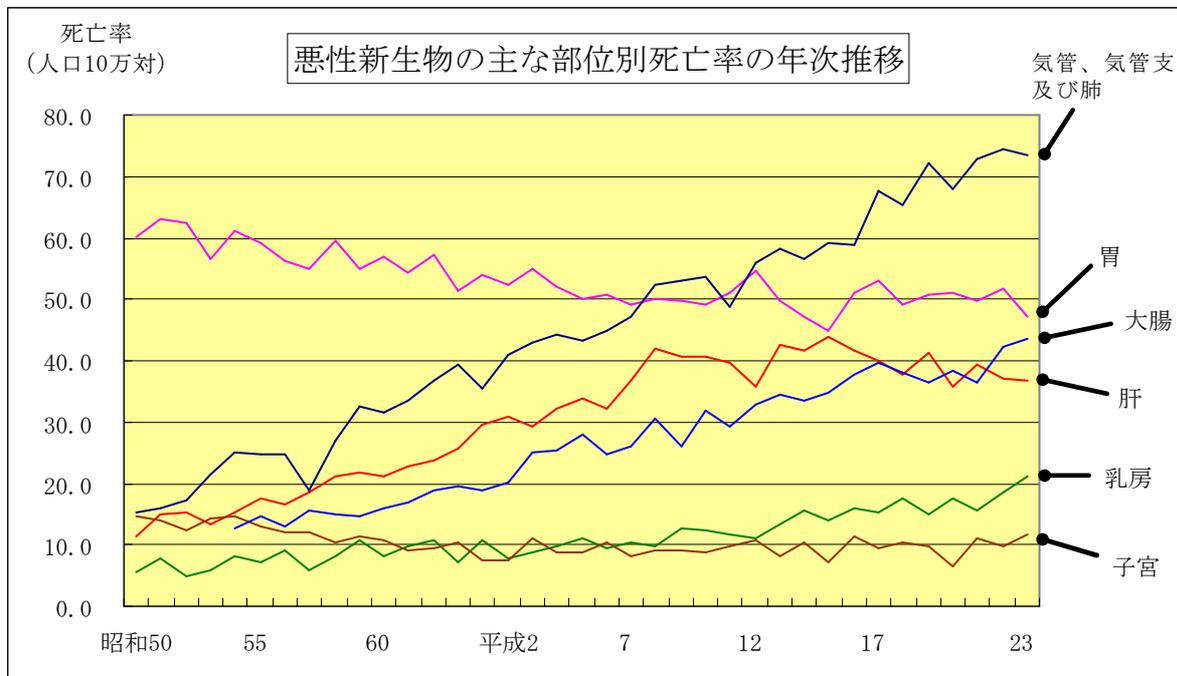


(3) 部位別に見た悪性新生物

悪性新生物での死亡数は3,457人であり、前年の3,440人よりも17人増加した。

死亡率を部位別に見ると、1位「気管、気管支及び肺」2位「胃」3位「大腸」となっている。

「気管、気管支及び肺」は、平成8年にはじめて「胃」を上回り、平成11年を除き1位となっている。



注) ① 「大腸」は昭和54年からの分類である

② 「乳房」「子宮」は女性10万人対の死亡率である

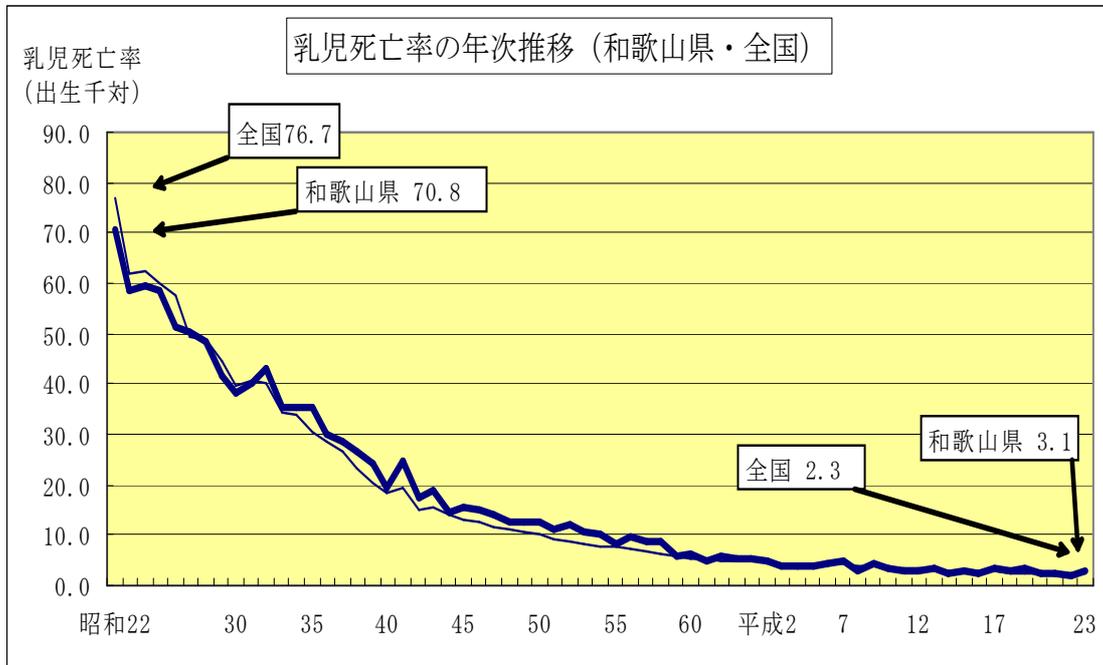
(4) 乳児死亡、新生児死亡

平成23年の乳児死亡数は23人で、前年の16人より7人増加した。

乳児死亡率（出生千対）は3.1で、前年の2.1を上回った。

また、平成23年の新生児死亡数は15人で、前年の10人より5人増加した。

新生児死亡率（出生千対）は2.0で、前年の1.3を上回った。



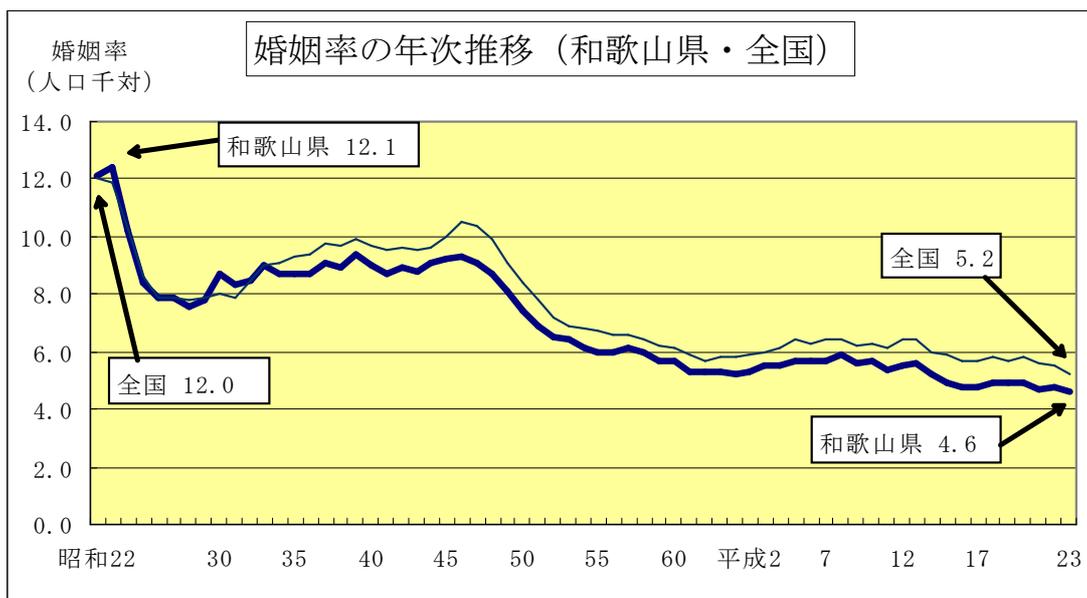
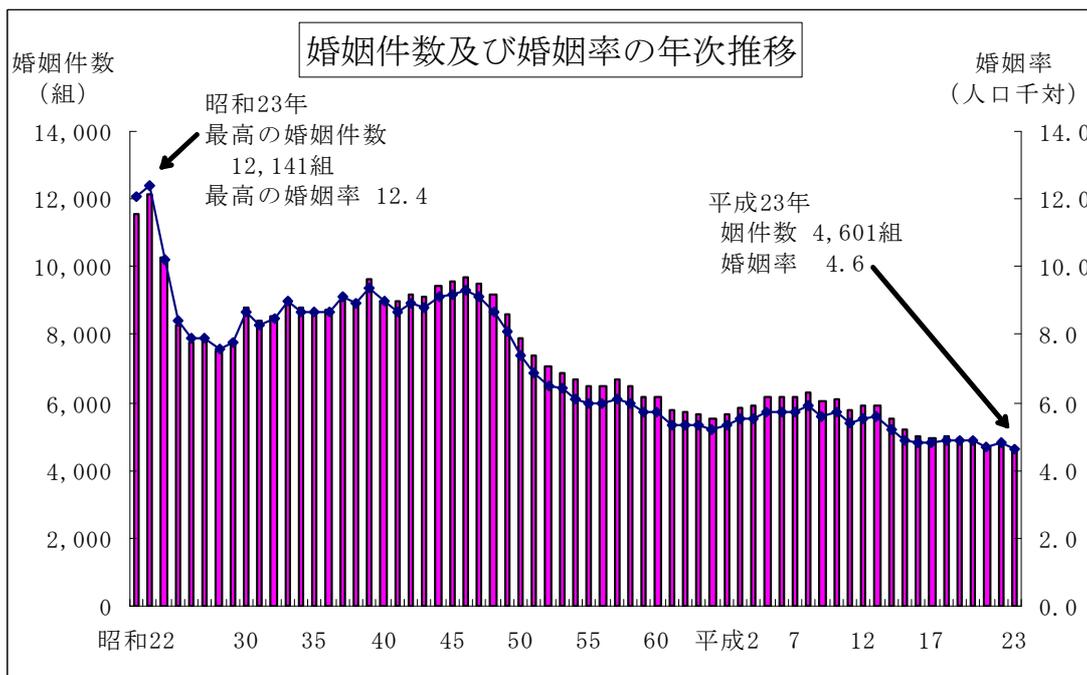
3 婚姻

平成23年の婚姻件数は4,601組で、前年の4,771組より170組減少した。

婚姻率（人口千対）は4.6で、前年の4.8を下回った。

昭和23年以降、婚姻件数は急激に減少し、昭和30年から40年代前半には9,000組前後で推移していたが、昭和46年以降は再び減少傾向となった。平成元年からは緩やかな増減を繰り返していたが、平成14年からは連続で減少し、平成18年は5年ぶりに増加した。しかし、その後は減少し、平成22年は増加したが、平成23年は再び減少した。

平成23年の平均初婚年齢は、夫29.9歳、妻28.4歳となり、前年と比べて夫・妻ともに0.2歳上昇している。

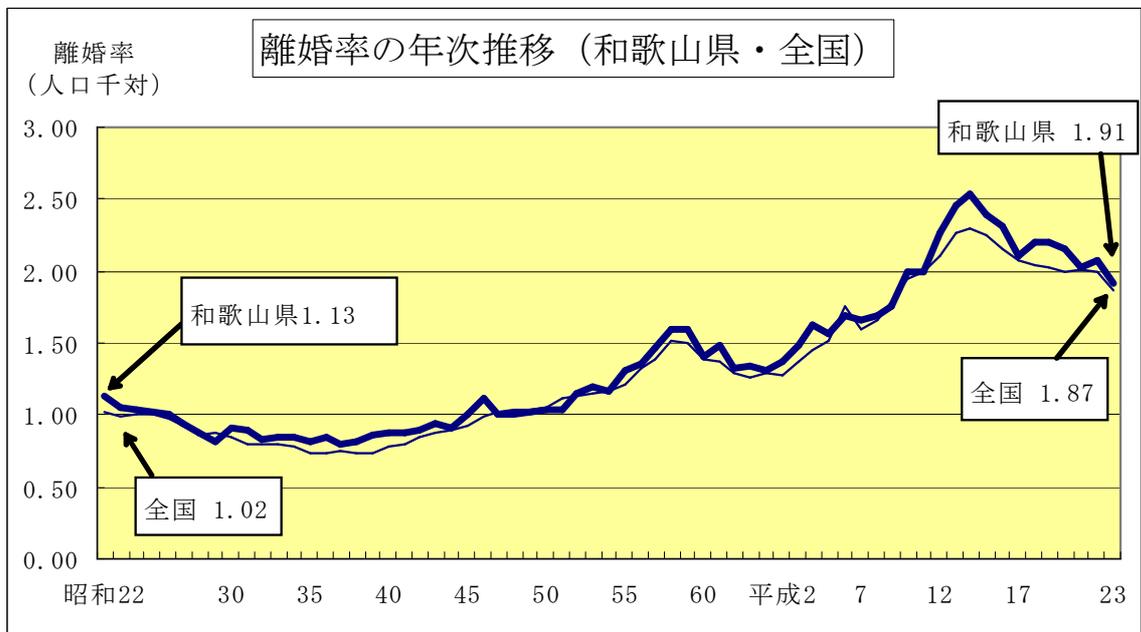
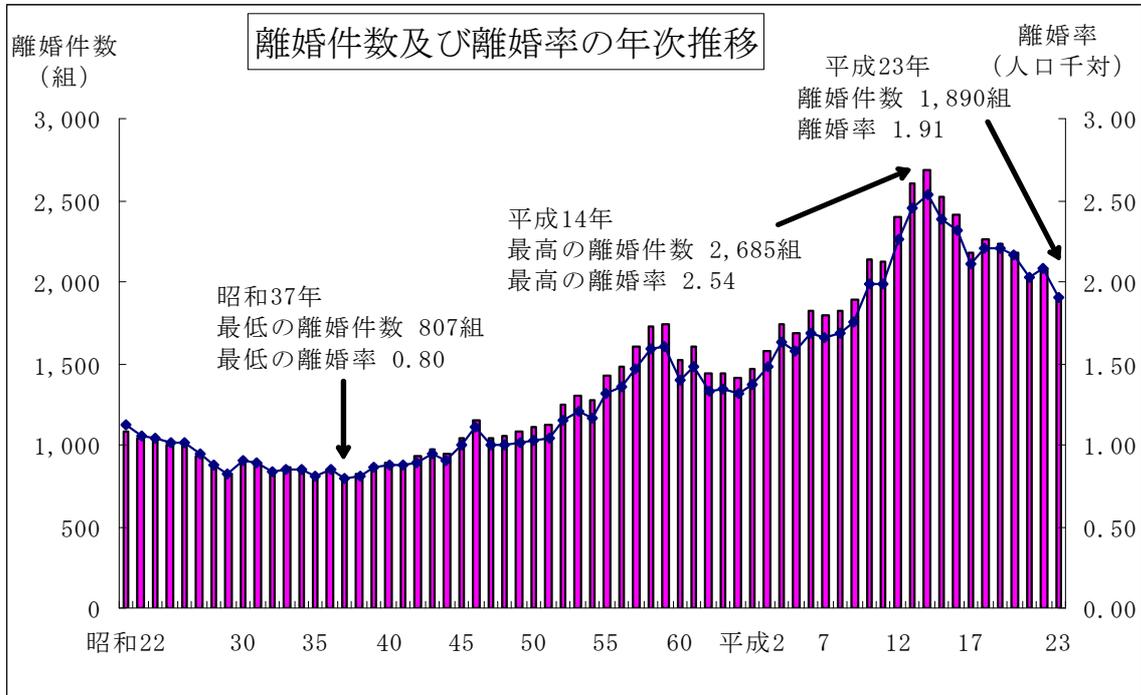


4 離婚

平成23年の離婚件数は1,890組で、前年の2,077組より187組減少した。

離婚率（人口千対）は1.91で前年の2.08を下回った。

昭和37年以降、離婚件数は緩やかな増加を続け、昭和59年から減少するが、平成元年以降は急激に増加し、平成14年をピークに減少傾向に転じている。



IV 統計表